



横須賀発！「ヤサイクル」の取組み

生ごみを資源として活用し、食品関連事業者や農家を含めた自立循環型リサイクルループ=ヤサイクルを考案し実践している「株式会社横須賀軽金」にお邪魔し、ヤサイクルの生みの親・小野仁志社長にお話を伺いました。

ヤサイクルを考案して、(株)横須賀軽金の社内に「環境事業部」をつくり、この事業に情熱をかけていらっしゃる、熱い思いが伝わって来ました。

もったいない、大量廃棄をせず、資源に再生出来ないか？

ヤサイクルのきっかけになったのが、横浜ベイシェラトンホテル&タワーズとの出会い。食品資源再生機器「生ごみ処理機」・マジックバイオくんを販売したことでした。実は、ベイシェラトンでは、毎日およそ1tの生ごみが出ていて、その処理が悩みだったそうです。

処理機販売の交渉の中で、販売するだけではなく、再利用がきちんと出来るまでのノウハウを構築しなければ、と考えた小野さん。そこで、生まれたのが「ヤサイクル」です。



これが『自立』循環型サイクルループです。

小野さんが、ヤサイクルに取り組み始めたのは6年前。シェラトンから始まったヤサイクルの輪は、箱根の「山のホテル」、葉山の「日影茶屋」、今も野菜からソースを作っている東京・滝野川の「トキハソース」、そして、横須賀の「カフェ・ド・クルー」……と広がり、自治会や幼稚園などでも注目され、園児の食育や体験学習に、また地域の家庭から出る生ごみの資源化に活用されるようになりました。

堆肥を提供し、できた野菜を買い取る契約農家。農薬や化学肥料をなるべく使わない野菜づくりをしている「こだわり」の農家と契約をし、今は北は北海道から、南は沖縄まで、70件をこえています。

日本の食べ物の廃棄物は年間、22,000t。(国民一人当たり171kg)世界でいちばん食べ物を捨てている国といわれています。これだけの食べ物があれば、世界で飢えて亡くなっていく子ども達がたくさん、飢えを凌ぐ事が出来るのです。

今回お話を伺った小野さんの取組み、横須賀発！のヤサイクルの輪が、もっともっと広がる事を期待しています。



こども若者応援団

2/23、横須賀市総合福祉会館で、私も関わらせて頂いている「こども若者応援団」主催のイベントが行われました。

今回のテーマは『いじめない 共に生きる 学校から社会へ』。講演会のスピーカーは、川崎市在住でNPO法人「ジェントルハートプロジェクト」に所属し講演をされている篠原宏明さん。2010年6月、中学3年生だった篠原さんの次男・真矢さんが、「友達をいじめから守れなかった」との遺書を残し、自宅のトイレで命を絶ちました。親友がいじめられているのを止めに入ると、その後は真矢さんが、いじめの対象になり、殴られたり下着を脱がされたり……。いじめられている子ども達の心の動きなど、当事者として、子どもを失った親の悔しさをうちに秘めながら、淡々とお話しして下さいました。

篠原さんは「いじめは生きる力を奪う、心と身体への暴力です。そして、それは人権問題だと。そこに、理由や落ち度があれば、人権侵害をしてもいいのでしょうか？加害者も好きで加害者になったわけではなくて、加害者になってしまったのではありませんか？とすれば、大人が寄り添わなくていけない」と話されました。

子ども達の声に耳を傾けると「いじめられている自分がイヤ」「いじめられてハズカしい」「親に話すと、たかがいじめと言われた」「先生に相談したら、仲直りをさせられた」(そんなことで、いじめは終わりません！)

県議会でも、代表質問・一般質問で毎回のように「いじめ」問題が質問されます。私も、最初の一般質問で取り上げました。要望で「スクール・バディ*」の取り組みなどを紹介したところ、県は、次の日に調査に行き、この動きに賛同してくれ、今も応援して頂いています。私が提案したのは一例ですが、いじめ問題の解決は、議場で話し合っただけでどうにかなる、なんて、甘い問題ではありません。100人のいじめられている子どもがいれば、解決法も100。この問題を解決するのは、大人の使命です。

子ども達、そして直接子どもに接する方達の、生の声をしっかり受け止め、どう対策すればいいのか、今後も解決策を模索し実践していきたいと、今回の講演で決意を新たにしました。



*スクール・バディとは、生徒同士の主体的な支え合いシステムです。自分達で「ビデオ撮影」「校内放送のDJ」「新聞・ポスターづくり」など、いじめを未然に防ぐ為に様々な企画を考え、学校内外に暴力防止といじめ防止を訴えています。